

知の巨人と言われた立花隆が4/30に80才で永眠。21.7.3 BS1 クローズアップ現代で紹介された。2000年代に入り、気候変動、中東でAI兵器戦争等の現実化で人類終末の切迫と宇宙飛行等の大進展・進化？の分岐が現実のものと考えられるようになり、人類の変革が迫られる。

この機会に講談社現代新書、「サピエンスの未来」立花隆著及び「生物と無生物のあいだ」福岡伸一著、「ウイルスは生きている」中屋敷均著等を並行して読んでみた。

1) 「サピエンスの未来」を要約すると、1900年前後の哲学者、思想家、生物学者等の空想の世界であったが現実味を帯びて来た。

①人は従属栄養生物から**将来は独立栄養生物になる可能性がある**。

食物を無機物（無生物）から直接合成出来る様にする。最近コスト、嗜好、安全性等で疑問はあるが、ある程度開発されている。しかし精神面、心理面の変化まで考える必要がある。

②宇宙の起源と一元論、これは未だ空想に近いかな～と思われるが～～

太陽の周りに人工の住居が出来、惑星、衛星などから物質が運んで来られ、様々な大気、重力、気温の急変に適した**多様な種が出現する**。その中で、**人は進化し最も完成されたタイプの有機体になる**。即ち人は死を克服し死ななくなる事も考えられる～でも数十億年先か？

2) 「生物と無生物のあいだ」は近年の生命観の変遷を示した好著で“生命とは自己複製を行うシステムである”生命とは動的平衡にある流れである。蛋白質は溜めることが出来なく、常に排出され、絶え間なく入れ替わっている。”と。⇒**高齢になっても蛋白質を十分摂るべし**、との根拠である。

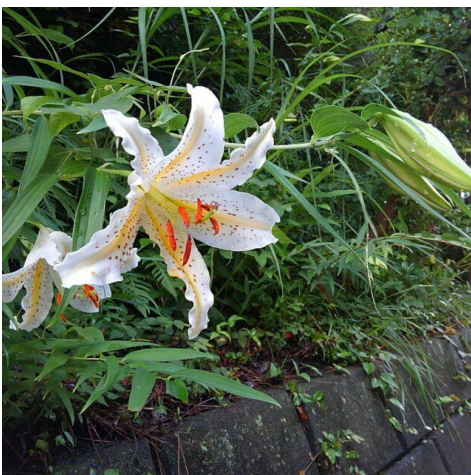
3) 「ウイルスは生きている」では

自然界では宿主と共生するウイルスは多く、**ウイルスが生物進化に貢献をしてきた**こともわかっている。ウイルスはただの物質ではなく生命体なのではないか、という問いから始まるサイエンスミステリー

4) 更に「ウイルスの意味論」山内一也著（みすず書房）では

**ウイルスは数万年間の凍結状態からも復活する**。シベリアの温暖化で永久凍土が溶け病原菌が発見された。

（日経・21.6.25）人類の脅威となる一方で、生命活動を支えるなどの共生関係にあるものもある。ウイルスにとって生と死、敵対と共生とは？⇒人類はウイルスで大進化するか？



鎌倉の手付かずの急斜面に自生する(庭には育たぬ)  
日本固有のヤマユリもウイルスに遣られたものがある。

